

有機的時価貸借対照表論の研究

—有機的把握と相対的価値維持—

長谷川 美千留

要旨

Schmidt, Fritz (1882-1950)は、その著書『有機的時価貸借対照表論』により、いわゆる有機論を展開した。有機論は、極めて複雑な理論であるが、企業環境と企業の間には有機的関係性を見出すという視点は、極めて現代的である。Schmidtによれば、穏やかな経済のバランスが安定的に維持されている場合でも、重要となるのは「企業と市場の関係性の研究 (die Untersuchung der Beziehungen zwischen Unternehmung und Markt) (Schmidt [1929/1951] S.1)」である。インフレーション期ではなくとも、企業環境は変化するのであり、その企業環境としての市場と、そこに存在する企業の相関性を探ることが重要なのである。なぜなら、「市場変化はいずれの経済状況においても存在する (Marktveränderungen wird es in jeder wirtschaftslage geben) (Schmidt [1929/1951] S.1)」からである。有機論には三つの側面がある。第一の側面は、非常に抽象的な企業観と企業環境観である。第二は総合経済と企業という経済学的側面である。第三は、相対的価値維持の原則、さらには費用計算によって展開される会計学的な計算構造という側面である。Schmidtは「経営経済学的計算手法 (der betriebswirtschaftlichen Rechnungsführung) に関し、今日のあらゆる問題の解決方法を探求するにあたって、企業の相対的価値維持の原則から (aus dem Grundsatz der Erhaltung des relative Wertes der Unternehmung) 出発する (Schmidt [1929/1951] 初版序文)」と述べている。相対的価値維持の原則は、有機論の象徴であることを示しているのである。

キーワード：有機的時価貸借対照表・有機論・Schmidt・相対的価値維持の原則

1. はじめに

Schmidt, Fritz. (1882-1950) (以下 Schmidt) は、有機的時価貸借対照表論と呼ばれる貸借対照表論を構築したことで有名である。Schmidtの展開した理論は、静的貸借対照表論ならびに動的貸借対照表論と同様、今日の会計理論において、その支柱の一つとなるものである。

Schmidtが生きた時代はどのような時代であったのだろうか。Schmidtの生きた68年間はドイツ史の中でも、激動の時代であった。二度

の世界大戦と敗戦、ドイツ革命による第二帝国の崩壊と共和国の成立、第三帝国の成立、ナチズムの台頭とその体制の崩壊など、社会的に大きな事件が立て続けに生じている。

Schmidtの生まれる11年前、1871年プロイセン国王であるヴィルヘルム1世がヴェルサイユ宮殿で戴冠式を行い、プロイセン王国によるドイツ統一がなされた。この帝国がいわゆるドイツ帝国と呼ばれる第二帝国である。

普仏戦争の賠償金は工業を発展させる起爆剤となり、「急速な産業革命を経験したドイツ

では、労働者の政治運動が進展していた(石田[2020]26頁)」という。その後、ヴィルヘルム2世が皇帝に即位した1888年から第一次世界大戦までの時期は「ヴィルヘルム時代と呼ばれる。経済的にも不況を抜け出し、ドイツは右肩上がりの上昇期を迎えたのである。(石田[2020]26頁)」第一次世界大戦、帝国の崩壊からヴァイマル共和国への転換とドイツは目まぐるしく社会国家体制を変化させていく。

Schmidtは、このヴィルヘルム時代の初頭に生まれたことになる。その後、二度の敗戦と国家の破綻危機に遭遇する。Schmidtの後期の著作には、社会、国家、政治を意識したものが見られ、このことはSchmidtの生きた時代背景が影響している。

本稿においては、はじめにSchmidtの主要な著作が著されたヴァイマル期のドイツ社会について概観する。次にSchmidtの考える有機観、有機的把握について再検討し、最後に有機論における重要な概念である相対的価値維持について、その有機的把握との関連性について検討する。

2. ヴァイマル期のドイツ社会

1918年ドイツでは11月革命が起き、ドイツ共和国が成立した。帝政ドイツからヴァイマル共和制への移行が図られたのである。このヴァイマル期、(ワイマール時代とも呼ばれる)は、帝政が崩壊した1918年またはヴァイマル憲法が制定された1919年から1933年までを指している。このヴァイマル期を特徴づけるものとして、ヴァイマル憲法(ワイマール憲法)が挙げられる。このヴァイマル憲法の時代、ヴァイマル期のドイツという国家は「むしろ弱体な、いまだ量的な意味の全体国家であり、『弱い』がゆえに様々な政党や利害団体の要

求に応じ(屈服し)、その結果、政治権力は衰弱して、事実上経済国家、行政国家(蔭山[2020]150頁)」であったとする評価もある。

ヴァイマル期は、以下の三つの時期¹に分けることができる。

1. ドイツ革命と第一次大戦、戦後インフレーション期(1919～1923)
2. 安定期(1924～1928)
3. 世界恐慌と終焉期(1929～1933)

このヴァイマル期には、社会的に大きな出来事があった。一つは第一次世界大戦におけるドイツの敗戦であり、この敗戦がインフレーションという形でドイツ経済を破壊したということはあまりに有名である。この時期には、Schmidtの有機的時価貸借対照表論をはじめ、重要な会計理論が構築されているのである。第一次世界大戦後、ドイツにおけるインフレーションの原因として、多くの場合、戦後の巨額賠償金が指摘される。しかし、その火種はドイツが戦時体制に突入する時期から、すでに燻っていた。

「ドイツの政治は戦争を常に国際紛争の解決のために必要な手段だとみなしていたにもかかわらず、1914年には社会政策的・経済政策的に準備をほとんどすることなく、戦争に突入した。平時経済から戦時経済へ転換が行われるまでの間、同年秋にはじめて深刻な経済危機見舞われた(矢野・ファウスト[2001]67頁)」のである。

戦時体制への転換が、きわめて急激に実施されたことにより、徴兵による男性労働者の減少、熟練労働者の不足、平和産業従事者と軍事産業従事者のアンバランス、農業の衰退や農産物輸入の減少による食糧危機など、ドイツ社会は様々な歪みを抱えていた。「戦後インフレーションの原因は戦中期にあった(矢野・

¹ 1918年から1923年までを革命から通貨の安定、1924年から1928年を相対的安定期、それ以降を世界経済恐慌の時期として分類す

ることができる。これについては、(矢野・ファウスト[2001]79-89頁)に詳しい。

ファウスト[2001]68頁)」。

Schmidt による有機的貸借対照表論や Schmalenbach, Eugen (以下 Schmalenbach) による動的貸借対照表論が構築されたのは、このヴァイマル期であり、政治思想家として有名な Schmidt, Carl (1888–1985) (以下 Schmidt, C) が『政治神学』を著したのもこの時期²である。帝政ドイツが崩壊し共和制へ移行する時代、活躍した政治思想家が先述の C. Schmidt であり、彼は「権威主義的な帝政ドイツからワイマール協和制への体制変革にもなって必要な理論的調整を行う過程で独自の政治理論を確立 (蔭山[2020]6頁)」したという。

ヴァイマル期は、そこで大きく掲げられる自由主義や共和国という名にそぐわない実態を形成していた。「ヴァイマル期は、一方では階級対立の先鋭化と、他方では世紀末以来姿を現しつつあった大衆社会状況の本格化という二重性 (矢野・ファウスト[2001]283頁)」によって、特徴づけられる。共和国の政治的脆弱さと社会的不安定、敗戦による心理的抑圧、激しいインフレーションによる経済的危機、労使対立の激化や大衆社会の確立は、1930年代ナチ時代につながる負のエネルギーの蓄積期間となっていたのである。

Schmidt は 1921 年『経済における有機的貸借対照表 (Die organische Bilanz im Rahmen der Wirtschaft)』を著し、翌年にはその続編 (第 2 版) を公表した。1924 年には、経営経済学雑誌 (Zeitschrift für Betriebswirtschaft) を創刊し、1929 年には『有機的時価貸借対照表』(第 3 版) を公表している。1920 年代は、Schmidt にとって、黄金期といえる。

Schmidt とほぼ同時期に活躍した研究者と

² 1920 年代のドイツの政治状況は「カトリックの中央党、保守派のドイツ人民党、社会主義政党のドイツ社会民主党とドイツ共産党、多少とも自由主義的なドイツ民主党、そして集信的國家主義のナチ党 (国民社会主義ドイ

して、Schmalenbach (1873–1955) が挙げられる。Schmalenbach は 1919 年『動的貸借対照表論の基礎』(Grundlagen dynamischer Bilanzlehr) を公表している。1920 年代は、Schmalenbach にとっても、その名声が頂点に達した時期であったといえる。

ドイツ革命と第一次世界大戦の敗戦によって生まれたヴァイマル期の政治体制ならびに経済の脆弱さは明らかであった。政治的体制の問題のみならず、第一次世界大戦の敗戦による巨額の戦争賠償金による激しいという経済財政問題もあり、この共和国の前途は多難であった。ヴァイマル共和制は、1923 年を境に一旦は、安定期を迎える。しかし、この安定期は束の間、1929 年にはアメリカ発の世界恐慌が生じ、ドイツ社会、経済にも再び暗い影を落とす。そして、1933 年ヴァイマル期はヒトラーによる政権掌握とともに、その終焉を迎えた。

3. 有機的とは何か

社会、国家、政治、経済すべてが不安定な時代を生きた Schmidt は、何を主張しようとしたのか。そして、何を解決しようとしたのだろうか。Schmidt は初版の序文 (初版は 1921 年) において、有機論を展開するに際し、彼の抱いた「確信 (Überzeugung) (Schmidt [1929/1951] 初版序文)」について、次のように述べている。「貨幣価値変動や生産の転換のような経営経済に深刻な影響 (tiefwirkende Erflüsse) に際し、継ぎ当て修理のような措置 (Flickmaßnahmen über den einzelnen Auswirkungen) を施すのではなく、むしろ、その関連性に対する根本的な認識 (grundsätzliche

ツ労働者党) の五つの系列に分類できる (蔭山 [2020]59 頁)」。

³ 「コンテララーメンがロシア語に翻訳されたこともあり、この時点で彼は栄光の頂点に達していた (コラス・藤田[2007]66 頁)」という。

Erkenntnis der Zusammenhänge) が必要である (Schmidt [1929/1951] 初版序文)」という。

Schmidt は、インフレーション下、対処療法的な経営対策に重きを置くのではなく、企業(経営)が直面している困難な環境と、そこから生じる問題との関連性、相関性の根本的理解に重点を置くべきであると主張する。この企業環境の変化と、そこから派生する問題の間に存在する相関性を理解すべきという主張は、Schmidt の有機観、相対的価値維持の原則とも共通する。

企業のおかれた環境の変化を一層鮮明に顕在化させたものは、この時代のインフレーションである。Schmidt の用いた Flickmaßnahmen という用語の Flick には「継当て、寄せ集め、やつつけ(仕事)、継ぎはぎ」といった軽蔑的な含みがある。このことは、企業の抱える問題に対する場当たりの対処は、意味をなさないことを示している。Schmidt は企業と企業環境の相関性を根本的に理解することの重要性を主張する。相関性は、言い換えれば有機的な関連性を意味している。

この相関性については、別の表現でも繰り返される。「有機的貸借対照表はこの樹に実る果実である。(Eine Frucht von diesem Baum ist die organische Bilanz) (Schmidt [1929/1951] 初版序文)」樹は、企業の置かれた困難な企業環境、その困難を克服するために生み出され、実る果実が有機論を暗示している。樹と果実は、切っても切れない。樹があり、果実がなる。果実の種からまた樹が育つ。この樹と果実のような相関性を深く理解すべきなのである。

Schmidt の有機論といえば、第一に、インフレーション下における企業の問題が中心である。しかし、Schmidt の思考の根底にあるものは、企業体は常に変化する環境下で、いかにして安定的な状況を維持するかという課題でもある。

Schmidt によれば、穏やかな経済のバランスが安定的に維持されている場合でも、なお一

層重要となるのは「企業と市場の関係性の研究 (die Untersuchung der Beziehungen zwischen Unternehmung und Markt) (Schmidt [1929/1951] S.1)」である。インフレーション期ではなくとも、企業環境は変化するのであり、その企業環境としての市場と、そこに存在する企業の相関性を探ることが重要なのである。インフレーション期ではなくとも、「市場変化はいずれの経済状況においても存在する (Marktveränderungen wird es in jeder wirtschaftslage geben) (Schmidt [1929/1951] S.1)」からである。

また Schmidt は企業の豊かさや幸せ (Wohlsein) についても述べている。Schmidt は企業という存在を有機的に把握し、敢えて、この用語で表現したのだろうか。そして企業が豊かな状況にあるかは「価値変動が形成される範囲 (Umfange von der Gestaltung der Wertschwankungen) (Schmidt [1929/1951] S.1)」に左右される。

静態でもなく、動態でもない。有機的という概念は、何を意味しているのか。会計理論上、一般的には静態論と動態論は対立する概念とみなされる。しかし Schmidt にとっては、それら静態論と動態論は、相互に密接に関係しているものであって、それらの違いは視点の相違に過ぎない。

Schmidt は有機的という概念を際立たせるように、静態と動態について、物理学の思考を用いた Auguste Comte (以下 Comte) の見解に触れる。「国民経済学の分野では、同様に、Auguste Comte により、古典物理学による単純な把握: 静態=静止状態 (Statik=Zustand der Ruhe)、動態=運動状態 (Dynamik=Zustand der Bewegung) (Schmidt [1929/1951] S.45)」という見解が示されている。次に Schmidt は、Oppenheimer による見解を提示している。

「Oppenheimer は動態の一部 (der Statik einen Teil der Dynamik) として静態を把握している。すなわち、それは作用する力が変化しない場

合、均衡状態にある運動 (die Bewegung im Gleichgewicht)である。(Schmidt [1929/1951] S.45) 静態は動態に内包され、すなわち静態とは静止ではなく運動の均衡という解釈である。これは、古典物理学の解釈とは異なる。

たとえば財産計算から損益計算への転換、財産が費用に転換する状況を考える。運動状態と静止状態は結合している。すべてを動態、運動で把握することは困難であり、またすべてを静態、静止で把握することも難しい。「完全な動的貸借対照表 (Eine voll dynamische Bilanz) とは、疑う余地もなく、企業における運動という現象から出発しなければならない (Schmidt [1929/1951] S.47)」。しかしながら、販売のために所有される在庫は、「販売されるその一瞬までは (bis zum Augenblick) 財産でもある。(Schmidt [1929/1951] S.47)」 Schmidt は財産計算と損益計算の密接性から、動態論の課題を論じている。運動(取引)は財産価値の増加をもたらす。完全なる動態の中で、運動のない状態をどのように把握するか。

「Scmalenbach による動的貸借対照表に対する唯一の本質的な異議 (Der einige und wesentliche Einwand) は、それが十分に動的ではない (sie nicht Dynamisch genut ist) ということ (Schmidt [1929/1951] S.47)」である。

これと同様の矛盾は、「静態論的思考にも見出すことが出来る。静止の状態というものはあくまで想定であり、経済とは常に動き続けるからである。Schmidt は次のように述べる。「経済において、静止の状態は存在しない (daß es in der Wirtschaft einen Zustand der Ruhe nicht gibt) (Schmidt [1929/1951] S.45)」のである。

Schmidt は静態的見解と動態的見解について、その相違ではなく、むしろ同質性を主張し

ている。この同質性について、結合という表現で著している。Schmidt にとっては、対象物の状態を静態と動態という二つの視点から把握しているに過ぎないのである。Schmidt は文脈の中で、有機論を前者、後者を静態論および動態論とし、この三つの理論を三者ではなく、二つに対比させている。「後者 (letztere) (引用者：静態論ならびに動態論) は、お互い緊密に結びついて (eng miteinander verknüpft) おり、同様の経済的現象 (den gleichen wirtschaftlichen Geschehens) を二つの異なる観察方法 (zwei verschiedene Betrachtungsweisen) で表現しているにすぎない (Schmidt [1929/1951] S.47)」と述べる。そして Schmidt の展開する有機論 (die Organik) すなわち有機的思考 (das organische Gedanken) は、「経営経済学的な事象は、企業という狭い領域の中でのみ探求されるべきではないという (引用者：社会的) 要求にこたえるものであり、まず、今一度研究者たちの観察領域を拡張する (den Beobachtungskreis des Forschers erweitern (Schmidt [1929/1951] S.47)」のである。

動的思考について、Schmidt は一定の評価をしている。動態論的立場と有機論的立場について「動態論的立場と有機論的立場の間の対立 (Ein Gegensatz zwischen dynamischer und organischer Einstellung) は学問的に存在しない (Schmidt [1929/1951] S.48)」とし、両者の最終的な目的は「真実に向けた厳密な学問的探究 (das streng wissenschaftliche Forschen nach Wahrheit) (Schmidt [1929/1951] S.48)」であると結論付ける。

Schmidt は個別問題と題して、有機的経営体把握 (Die Organische Betriebsauffassung) について説明している。⁴「経営体 (Der Betrieb)

⁴ 『ベトリープとは、ある種の継続的な目的行為のことを、ベトリープ団体とは、継続的に目的行為を営む行政スタッフを備えたゲセルシャフト結成のことを、指すべきである』 (中略) 我々が持続的に合理的行為を営む舞

台を成すのがこのベトリープ団体であり、自治体や企業のほかに学校や病院などの法人、軍隊などが挙げられる。従来は「経営」「経営体」と訳されてきたが、病院や軍隊には馴染まない。ただし、経済的ベトリープを経営

は有機体 (Organismus) であり、この有機体としての経営体の中を、継続的な二つの流れが正反対の方向へ貫流 (Schmidt [1929/1951] S.395)」している。Schmidt はこれと類似する説明を、別の章においても価値の流れの話として示している。しかしながら、著作の冒頭では抽象的であったものが、最終章、個別問題の中で明確になる。Schmidt がよく用いる二つの (価値の) 流れは、貸借対照表においては借方・貸方か、損益計算においては収益・費用であり、「これらの流れに関するその時々割合 (verhältnis) は総合経済における貨幣価値 (Geldwert) に左右される。(Schmidt [1929/1951] S.395)」有機的な把握とは、ある環境に存在する有機体としての企業を想定し、企業環境と企業の根本的な関係性を重視し、その企業を貫く二つの価値の流れについて差異を測定する。この測定においては、時間軸を揃えること、すなわち、その測定時点の価値の差異が重要となる。価値測定の時点を合わせることが重要なのである。

現代ドイツの静態論者である Moxter, Adolf (1929-2018) (以下 Moxter) は、静態論、動態論、有機論について、次のように端的に特徴づけている。「有機的観察法 (die Organische Betrachtungsweise) は第一義的に総合経済的なもの (gesamtwirtschaftliche) として特徴づけられ、これに対して、静態論は第一義的に法的な観察法 (rechtlichen Betrachtungsweise) であり、ある意味においては、動態論は第一義的に経営経済的観察法 (betriebswirtschaftlichen Betrachtungsweise) である (Moxter [1984] S.57)」という。確かに Schmidt 自身、「企業を有機的に把握する (organisch auffassen) ということはそれを総合経済の一部 (als Teil der Gesamtwirtschaft) とみなすこと (Schmidt [1929/1951] S.395)」と説明している。

と表記し、これが行政単位や非営利組織にも転用されていると考えれば、そう違和感はない。

Moxter は、Schmalenbach による Schmidt に対する評価を用い、「Schmalenbach による表現方法 (Ausdruckweise) によれば、Schmidt は非科学的な二元論者 (ein unwissenschaftlicher Dualist) (Moxter [1984] S.59)」であると述べている。静態論者または動態論者にとって、貸借対照表の目的は、それぞれ財産計算もしくは成果計算のいずれか一方に重点が置かれるべきであり、両方の目的を同等に達成することは困難だからである。「Schmidt は、彼の有機的貸借対照表を、あらゆる貸借対照表目的を満たす万能な貸借対照表 (Universalbilanz) とみなしている (Moxter [1984] S.58)」。

Moxter は Schmidt による万能な貸借対照 (Universalbilanz) を批判し、有機論の特徴について、以下のようにまとめている。

1. Schmidt は貸借対照表により、適正な財産 (das richtige Vermögen) ならびに (これと同様に) 適正な利益 (den richtigen Gewinn) を測定しようとしている。
2. Schmidt は、その有機的貸借対照表を全ての貸借対照表目的 (die allen Bilanzaufgabe) にかなった万能の貸借対照表 (eine Universalbilanz) と見なしている。
3. Schmidt によれば、適正な財産測定 (zutreffender Vermögensermittlung) という意味における貸借対照表の真実性 (Bilanzwahrheit) は、時価調達価値 (Tagesbeschaffungswerte) による評価を通じて達成される。時価調達価値で評価された財産は企業の再生産価値 (Reproduktionswert des Unternehmens) を示す。
4. Schmidt によれば、利益測定 (Gewinnermittlung) に際しても、時価調達価値 (Tagesbeschaffungswerte) による費用価額を用いる。

(Moxter [1984] S.59)

Schmidt は伝統的な静的でも現代的な動的

い。さてその運営体の代表格は、やはり、国家と企業であろう (小林 [2006] 250 頁)。

でもない、有機的という概念⁵から展開される抽象的な企業像を示し、これを体現する「有機的計算制度 (organischen Rechnungswesens) (Schmidt [1929/1951] S.395)」を生み出そうと試行錯誤する。

そして「企業の有機的把握にとって最上級の原則こそが (oberster Grundsatz für die organische Betrachtung der Unternehmung) 相対的価値維持の原則 (das Prinzip ihrer relative Werterhaltung) (Schmidt [1929/1951] S.395)」であると述べる。有機的という概念を象徴する原則が相対的価値維持の原則であることを、最後に一層明確にする。

4. 相対的価値維持の原則

Schmidt は、有機論について、有機体 (Organ) という極めて抽象的なイメージと表現を用いて企業と企業環境を説明しようとしている。有機論には三つの側面がある。第一の側面は、非常に抽象的な企業観と企業環境観である。第二は総合経済と企業という経済学的側面である。第三は、相対的価値維持の原則、さらには費用計算によって展開される会計学的な計算構造という側面である。初版の序文の冒頭において、Schmidt は「経営経済学的計算手法 (der betriebswirtschaftlichen Rechnungsführung) に関し、今日のあらゆる問題の解決方法を探求するにあたって、企業の相対的価値の維持の原則から (aus dem Grundsatz der Erhaltung des relative Wertes der Unternehmung) 出発する (Schmidt [1929/1951] 初版序文)」とも述べている。有機論を展開するにあたり、すでに相対的価値維持の原則が、その象徴であることを示している。

Schmidt は、「この適正な費用価値の問題 (die Frage des richtigen Kostenwertes) は、相対的価

値維持の観点ならびに適正な価値形成の観点からも (vom Standpunkt der relative Werterhaltung und richtigen Wertbildung)、なお一層研究されるべき必然性 (die Notwendigkeit) が明らか (Schmidt [1929/1951] S.145)」であるという。企業は価値の流れの中にあるという Schmidt の根本的な思考に基づき、適正な価値の形成と費用計算の問題を結合しようとしているのである。

次に Schmidt は総合経済における生産性の推移と費用計算の関連性に着目する。「生産性推移 (Produktivitätsverschiebungen) がどのような方法で実際の計算 (in der praktischen Kalkulation) に作用するか (Schmidt [1929/1951] S.145)」を熟考すべきであるという。相対的価値維持の原則は生産性推移を反映した費用計算によって体現されるのである。

既に述べたように Schmidt は「企業の有機的把握にとって最上級の原則こそが (oberster Grundsatz für die organische Betrachtung der Unternehmung) 相対的価値維持の原則 (das Prinzip ihrer relative Werterhaltung) (Schmidt [1929/1951] S.395)」であるとし、有機論 (Schmidt は有機的把握という用語を用いている) を最も具体的に体現するものとして、相対的価値維持の原則を挙げる。「有機的経営体把握 (Die organische Betriebsauffassung) は、正当な相対的価値維持の原則と錨でつながれたように強固に結び付いている (fest verankert)。経済の自然法則において、費用価値として (als Kostenwert) 時価による調達価格 (Tagesbeschaffungspreises) の適用を通じて、有機的経営体把握は、生来、相対的価値維持の原則に密着している (sich anschmiegt) (Schmidt [1929/1951] S.396)」のである。「企業における相対的価値維持の問題 (Das Problem der

⁵ Schmidt が、国家有機体説や、Spencer, Herbert (1820-1903) による社会有機体説といった思想を自らの理論との関係性でどのよう

に把握していたのかについては、特に言及がない。

relative Werterhaltung der Unternehmung) はまた、根本的には、生産性変動 (der Produktionsverschiebungen) の影響に応じた費用計算の適用問題 (der Anpassung der Kostenrechnung) (Schmidt [1929/1951] S.146) に他ならない。「企業の相対的価値維持 (Relative Werterhaltung der Unternehmung) は、総合経済において平均生産性 (der Durchschnittsproduktivität in der Gesamtwirtschaft) の形成が比例的に保持されるべき (erhalten werden soll) であるということの意味している (Schmidt [1929/1951] S.146)」。

企業は総合経済との間でのバランスを維持することが重要であり、それは、企業が総合経済の変化に応じ、そこで必要とされる生産を過不足なく維持することで達成される。また、このように企業が総合経済における需要の変化に応じた生産性を維持することにより、生産物の価値維持を試みる。

しかし、生産性変動を厳密に把握することは至難の業である。「企業の相対的価値維持のこのような要求 (Anforderungen der relative Erhaltung der Unternehmung) に適応する計算の標準 (einen Kalkulationsmaß) を発見すること (Schmidt [1929/1951] S.146)」が課題となる。企業の相対的価値維持に適応する計算の標準を見出せば、「商人は変化する生産性に条件づけられた (als die veränderte Produktion bedingt) 相応の価格で販売・売却をすることができる (Schmidt [1929/1951] S.146)」。つまり、この相対的価値維持の原則により、企業は市場の状況に即した売価による販売が可能になるというのである。「企業の相対的価値維持は同時に、生産と消費の継続的な均衡 (ein dauernder Gleichlauf von Produktion und

Konsumption) を完全に保証するような費用標準 (Kostenmaßstab) を選択する (Schmidt [1929/1951] S.146)」という。

生産量のコントロールと費用計算の適正性によって、この相対的価値維持の原則は体現される。企業環境の変動のみならず、生産物の価値が費用化された瞬間という時間軸が重視され、費用計算の基準日と収益実現の間の時間軸が揃うこともまた重要なのである。

これについて Schmidt は「それゆえ、この根拠からしても、総合経済的要求 (gesamtwirtschaftlichen Anforderungen) に最も適応するのは販売日の補償費用価値 (Ersatzkostenwertes Verkaufstages) による計算である (Schmidt [1929/1951] S.144)」という。これによって「売上領域の価値ならびに貨幣領域の価値 (die Werte der Umsatz -wie der Geldsphäre) は比例的に (proportional) 推移 (Schmidt [1929/1951] S.144)」する。

Schmidt は以下のようないくつかの計算方法を示している。

- ①消費日の費用量の調達価値に対する名目的計算 (Die nominale Kalkulation zu Anschaffungswerten der Kostenmengen des Verbrauchstages) (Schmidt [1929/1951] S.153)
- ②売上⁶日における消費日の費用量の調達価値による計算 (Die Kalkulation mit dem Beschaffungswerte der Kostenmengen des Verbrauchstages am Umsatztage) (Schmidt [1929/1951] S.154)
- ③売上日における売上日の費用量の調達価値による計算 (Die Kalkulation mit dem Beschaffungswerte des Kostenmengen des Umsatztages an Umsatztage) (Schmidt [1929/1951] S.155)

⁶ Umsatz の概念規定について「Umsatz の概念は、生産工場における売上げ、販売 (Absatz) に対してとくに適用される。(中略) Werner の

Umsatz の概念は広く単なる売り上げではなく、取引高、成果も意味されている (海藤[1997]34頁)」という。

④と⑤補償日の価値による計算

(Die Kalkulation mit den werten des Ersatztages)

(Schmidt [1929/1951] S.159)

Schmidtはこの上記の①から⑤のうち、③について次のように評価する。「これが生産と消費の均衡 (Gleichlauf von Produktion und Konsumption) ならびに価値均衡の維持 (die Aufrechterhaltung) を確実にする唯一の (einzige) 方法 (Schmidt [1929/1951] S.155)」である。

Schmidt は「生産性推移 (die Produktivitätsversiebung) (Schmidt [1929/1951] S.155)」という言葉に固執している。企業の置かれている環境の経済的な変動がない場合、換言するなら、景気変動が生じていない場合、消費時と売上時の間の費用計算に関する (価値) 問題は生じない。Schmidt の表現に従えば、「二つの期間の間の費用部分の価値変動 (die Wertänderung der Kostenteile zwischen beiden Terminen) (Schmidt [1929/1951] S.155)」が生じないのである。費用計算において、消費時と売上時の外部経済環境が同様であれば、費用計算における価値問題は生じない。しかしながら、消費時と売上時の間に生産性推移という経済的な変化が生じていれば、そこには費用の価値変動に関する問題が生じるのである。

「売上日における売上日の費用量の調達価値による費用計算は (mit dem Beschaffungswerte des Kostenmengen des Umsatztages an Umsatztage 同時に一般的な生産性推移に比例した (proportional der allgemeinen Produktivitätsversiebung)、企業の相対的価値維持である (Schmidt [1929/1951] S.159)」と Schmidt は断言する。企業の相対的価値維持は「生産および消費が自動的に (Produktion und Absatz automatisch) 相互に同期・平行して維持される (in Gleichlauf miteinander gehalten werden) に際し、(企業の相対的価値維持すなわち売上日の売上量の調達価値による費用計算は：引用者)、時間という要因 (den Faktor Zeit) を結果

としてもたらず (Schmidt [1929/1951] S.159)」という。

しかし、企業外部経済環境と費用計算を厳密に結びつけることが果たして可能であろうか。企業と企業外部環境との相関性というものを抽象的に推測することはできる。また、費用計算に際し、経済的変動について、一定の制約下で概要を把握することはできたとしても、厳密に把握することは難しい課題であろう。

「消費時と売上時の間の消費量の変化 (die Veränderungen der Kostenmengen zwischen Verbrauchs-und Umsatztag) は、生産性の推移 (die Produktivitätsversiebung) でもある。しかし、これはまた二つの期間の間の費用部分の価値変動 (die Wertänderung der Kostenteile zwischen beiden Terminen) としても、真価を發揮するのである (Schmidt [1929/1951] S.155)」よって、価値の補償が重要となり、費用計算における価値の補償計算を行うことにより、企業は外部の経済環境に対し、ある種の調整役をも果たすことが出来ると Schmidt は考えるのである。

「このような費用計算の方法が示しているのはまた、自動的にかつ瞬間的に生産性推移を通じて (automatisch und augenblicklich durch Produktionsverschiebungen) 販売ならびに生産財に基づく生産資本の誤った配分を制約し、企業家によって即時の訂正 (die sofortige Korrektur) を可能にする (Schmidt [1929/1951] S.156)」ということである。このように会計の中に経済を把握し、シグナルを発する機能や調整機能をも期待する。

「従来、取得費用による計算 (die Kalkulation zu Anschaffungskosten) は、補償費用 (=時価調達費用:Tagesbeschaffungskosten) による計算と区別されてきた。(Schmidt [1929/1951] S.149)」Schmidt のいう補償費用の計算は、調達時価費用、売上時の調達価値であり、ここに重点を置いている。

補償費用計算は Schmidt の思考の中では、総

合経済の自動調整装置のように機能する。企業の誤った計算は総合経済に悪影響を及ぼし、企業の正しい計算は総合経済を正しい方向へと導く。「適正な計算をしている企業家 (Unternehmer der richtig rechnet) にとっては、特別な価値による合図 (Fingerzeig von besonderem Werte sein) がある (Schmidt [1929/1951] S.157)」という。一方、誤った計算をしている企業家は「再生産価値以下になる製品 (Produkte herstellt ,die unter dem Reproduktionswerte liegen (Schmidt [1929/1951] S.157)」を過剰に総合経済に放出してしまうという。

Schmidt は、適正な費用計算、適正な売価、消費者による適正な行動 (需要)、企業者による市場を反映した適正な費用計算に基づく適正な生産 (供給) というような循環を想定しているのだろうか。「消費者は (Der Konsument)、補償日において売却された財の補償のために (für den Ersatz des verkauften Gutes) 必要となる費用部分のすべて (alle Kostenteile) をその価格において補償する (ersatz) (Schmidt [1929/1951] S.158)」という。つまり、適正な費用計算により導かれた補償費用をすべて賄う価格によって、生産物が総合経済に放出されることが望ましい。総合経済という視点から補償費用の計算をすることと消費行動が関連していることを示唆する。

「総括として、最終的に言えることは (Zusammenfassend ist schließlich zu sagen) 以下のことである。(前述の：引用者) 五つの方法のうち一つのみが、企業の相対的価値維持の観点 (vom Standpunkte der relative Werterhaltung der Unternehmung)、そして総合経済における経済的な均衡の保持 (der Aufrechterhaltung des wirtschaftlichen Gleichgewichts in Gesamtwirtschaft) という観点に立ち、あらゆる要求を十分に満たす (allen Ansprüchen zu genügen vermag)。(Schmidt [1929/1951] S.160)」
企業の相対的価値維持の原則は、総合経済

における経済的均衡をももたらす。費用計算に生産や消費を均衡させる、また場合によっては、混乱させる機能さえもつことを Schmidt は繰り返し主張するのである。

5. むすびにかえて

Schmidt の生きた時代のドイツは、社会・国家・政治・経済が混迷を極めた時期であった。不安定な環境のもと、そこに有機的な関係を持ちつつ存在する「個」という、有機論の根底にある視点は、Schmidt の生きた時代背景を投影している。Schmidt は「自由経済の欠点 (Mängel der freien Wirtschaft) は不適切な所得配分、そして消費者側の市場に対する認識の乏しさ (geringen Marktbewußtsein auf seiten der Konsumenten) (Schmidt [1929/1951] S.13)」と述べている。消費者自身が市場に対し、敏感かつ高い意識を持つことの重要性を示唆している。消費者の意識の低さ、市場への鈍感さ、そして、誤った計算に伴う不適正な企業行動が経済を攪乱する、という思考は、反面、企業の適正な行動は、社会や経済を適正な方向に導く、という考えを示している。市場認識 (Marktbewußtsein) という言葉を、Schmidt は頻繁に用いる。これは社会認識と言い換えても良いであろう。社会や経済に高い意識を持つことの重要性を Schmidt は強調する。「市場認識 (Marktbewußtseins) の様々なグレードは、その生活の中に非常に明確 (sehr deutlich) にあらわれる (Schmidt [1929/1951] S.5)」。市場認識の高さ、経済への関心度は生活水準に如実に現れるというのだ。これは企業や経営者のみに、向けられた言葉ではない。Schmidt は「市場認識のある経済的に賢い主婦 (die marktbewußtere geschulte Wirtschaftlerin) (Schmidt [1929/1951] S.5)」は先行きを見越して賢い購買行動をするが、「経済的に未熟な労働者の主婦 (wirtschaftlich ungeschulte Arbeiterinnen) (Schmidt [1929/1951] S.5)」は、生活に必要な品を高値でつかまされてしまう

という例を出している。すべての人に市場意識、市場や経済、社会との相関性を意識することが重要であると示唆しているのである。

そして、Schmidt は有機的貸借対照表把握を体現するものとして、相対的価値維持の原則を挙げる。また、この相対的価値維持は企業と企業環境の相関性という有機論の基本理念を体現するものである。

相対的価値維持の原則は、補償費用という概念から導かれる費用計算である。企業の相対的価値維持を体現する適正な計算が、生産と消費の均衡をもたらすという。Schmidt は会計における計算の中に、経済の状況を反映するだけでなく、経済の均衡を調整する機能をも見出そうとする。数量、生産性、価値、費用、測定タイミング等、様々な領域の要素を複合的に織り交ぜ、自らの理論を構築しようとするが、費用計算に、果たして経済をコントロールする力があるのか、という基本的な疑問が生じるのである。

この実効性はさておき、企業の誤った行動が経済に悪影響を及ぼし、その歪みを強調することは事実である。Schmidt の生きた社会背景を敢えて考察することにより、個人の誤った行動が積み重なることで、国家はその歪みを強調し、その歪みは再び国民である個人に災いとなって返ってくることを歴史的に理解できる。有機観や相対的価値維持という思考は、我々が社会・国家と個人の相関性を考える重要性を示している。

企業と企業環境の間の相関性という認識は、現代においても重要な視点である。この思考は、現代のかつ画期的なものであると評価できる。しかしながら、経済学的な課題と会計学的な課題を、計算構造によって厳密に結合することは、困難である。そのような試みが容易に可能であれば、経済学と会計学は互いが、有機的な関係となり、いずれかがいずれかの器官として、取り込まれていたのではないだろうか。

参考文献

- Moxter, Adolf [1984] *Bilanzlehre. Band I Einführung in die Bilanztheorie*, Wiesbaden.
- Schmidt, Fritz [1929/1951] *Die Organische Tageswertbilanz*, Wiesbaden.
- Voss, T.M. [2016] *Regimes of Twentieth-Century Germany From Historical Consciousness to Political Action*, Capman University, USA.
- 池田浩士著 [2018] 『ドイツ革命 帝国の崩壊からヒトラーの登場まで』 現代書館。
- 石田勇治 [2020] 『20世紀ドイツ史』 白水社。
- 上野清貴 [1984 a] 「有機的貸借対照表論の利益概念 1」 『九州産業大学商経論叢』 第 25 巻 第 1 号 pp.95-117。
- 上野清貴 [1984 b] 「有機的貸借対照表論の利益概念 2」 『九州産業大学商経論叢』 第 25 巻 第 2 号 pp.157-181。
- 海藤進 [1997] 「ドイツにおける経営経済学総論」 奈良産業大学 『産業と経済』 第 12 巻 第 2 号 pp.25-38。
- 蔭山宏 [2020] 『カール・シュミット—ナチスと例外状況の政治学—』 中公新書。
- 小林順 [2006] 「マックス・ヴェーバー—宗教と経済」 八木紀一郎責任編集 『経済思想 7 経済思想のドイツ的伝統』 第 5 章 日本経済評論社。
- ベルナルド・コラス著 藤田晶子訳 [2007] 『世界の会計学者 17 人の学説入門』 中央経済社。
- 辻英史・川越修編 [2016] 『歴史のなかの社会国家—20世紀ドイツの経験』 山川出版社。
- トーマス・ニッパード著 大内宏一訳 [2021] 『ドイツ史 下—市民世界と強力な国家—1800—1866』 白水社。
- 中田清 [1979] 「研究ノート シュミット有機観と総合経済」 『修道商学』 第 20 巻 第 2 号 pp.67-90。
- 中田清 [2002] 稿 「シュミットの有機的貸借対照表論」 『神戸学院経済学論集』 第 33 巻 第 4 号 pp.25-46。

挾本佳代[1997]「スペンサーにおける社会有機体説の社会的重要性—群像としての社会と人ロ—」『社会学評論』日本社会学会誌 第 48 卷 2 号 pp.192-206。

長谷川美千留[2004]「有機的貸借対照表に関する一考察」『環境創造』第 1 卷 7 号 pp.31-40。

長谷川美千留[2021]「シュミットの有機論に関する研究」『八戸学院大学紀要』第 62 号 pp.45-56。

原田哲史[2020]『19 世紀前半のドイツ経済思想—ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト—』ミネルヴァ書房。

エーリッヒ・フロム著 佐野哲郎・佐野五郎訳[1991]『ワイマールからヒトラーへ—第二次大戦前のドイツの労働者とホワイトカラー—』紀伊国屋書店。

ヴォルフガング・ベンツ著・斉藤寿雄訳 [2013]『反ユダヤ主義とは何か 偏見と差別のしづとさについて』現代書館。

柳沢治[2021]『転換期のドイツ経済思想—経済史の観点から』日本経済評論社。

矢野久・ファウスト, アンゼルク[2001]『ドイツ社会史』有斐閣。

執筆者紹介 (所属)

長谷川美千留 八戸学院大学 地域経営学部
地域経営学科 教授